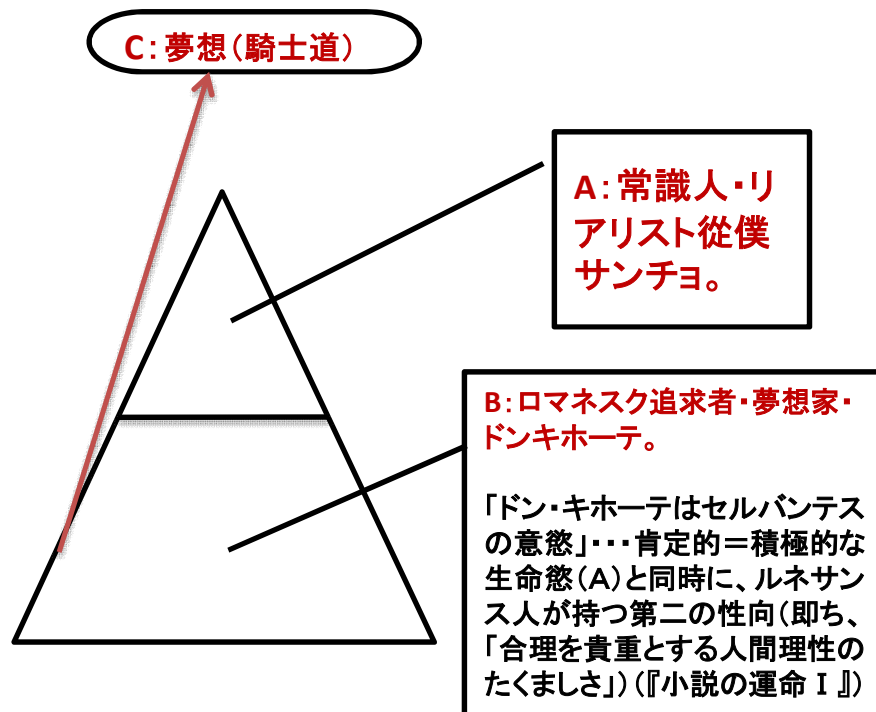


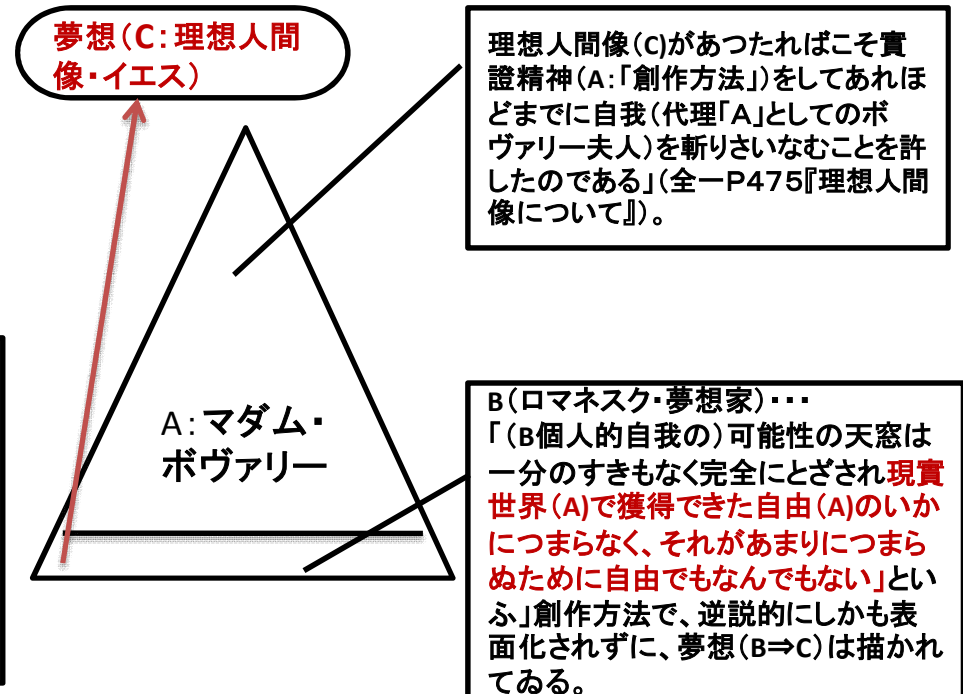
『小説のなかでおこなはれた小説の批評』とは・・・小説(ロマネスク)の中でおこなはれた、リアリズム(A)による、小説(ロマネスク:B)批評、即ち其處に生ずる「アイロニー」の事を指してゐる。リアリズムは「小説の内部に小説の生命をおびやかす危険な毒素」であるが故に「アイロニー」となるのである。「小説の運命はもともとそのアイロニーにある」と恒存は言ふ。「**小説はロマネスクであると同時にロマネスクを扼殺せんとするもの**」だと。(『小説の運命Ⅱ』から要約)

「ロマネスク追求者(作家も読者も)に残された唯一の望みといふのは(リアリズムに耐へしかも現實に屈從せず)さう言ふ自分(ロマネスク追求)を笑ふこと。「口邊に苦笑を浮かべる事によつて現實に耐へ、みずからをすくふ」(『小説の運命Ⅱ』)と。

『ドン・キホーテ』(セルバンテス)における「小説の批評」とは・・・リアリズム(A:常識・サンチヨ)がロマネスク(B:ドンキホーテ)を批評(批判)する事。ロマネスク(B)はリアリズム(A)の批判対象。「小説はロマネスクであると同時にロマネスクを扼殺せんとするもの」。その役がリアリズム。



『マダム・ボヴァリー』(フローベール)における「小説の批評」とは・・・リアリズム(A)の拡大がロマネスク(B)を扼殺していくアイロニーを指す。故にフローベールは、自己のロマネスク(理想人間像C)を語らない。彼の方法は、實證精神即ち「現實(リアリズム＝ボヴァリー:A)の醜惡を素材として美(B:ロマネスク・夢想家⇒C理想人間像)を志向する創作方法」とならざるを得ない。右下枠参照。「ボヴァリーの失敗によつて、(リアリズム)小説批評が完成される」のである。



〔口邊に苦笑を浮かべるとは〕

*つまりは、右圖の如き情況に耐へ、しかも「残された唯一の望み」として右圖の如き自己を笑ふ事。即ち、「泣く子と常識(A)⇒A)には勝てぬ‘うふふ’」と「口邊に苦笑をうかべる」事が、「みづからを救ふこと」に繋がる。と恆存は言ふのである。それを、《場から生ずる「関係(D1)」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る》で表現すると左圖の様になる。

かかる情況に遭遇した時、その「桎梏・ジレンマ:F」に對して、「泣く子と常識(A)⇒A)には勝てぬ‘うふふ’」と「口邊に苦笑をうかべる」フレイジング的行爲(E)で、それを「形ある『物』として見せること」。さうする事で「桎梏・ジレンマ:F」を自己所有化(Eの至大化)する事が可能となる。そして「ロマネスク(B)が一分の隙もなくなつてしまつたと言ふ場(c)」に沈湎してゐる自己を救ふ事(D1の至大化)が可能となるのである。「Eの至大化=D1の至大化」と言ふ事に…。

『マダム・ボヴァリー』(フローベール)における「小説の批評」とは…リアリズム(A)の拡大がロマネスク(B)を扼殺していくアイロニーを指す。故にフローベールは、自己のロマネスク(理想人間像C)を語らない。彼の方法は、實證精神即ち「現實(リアリズム=ボヴァリー:A)の醜惡を素材として美(B:ロマネスク・夢想家⇒C理想人間像)を志向する創作方法」とならざるを得ない。右下枠参照。「ボヴァリーの失敗によつて、(リアリズム)小説批評が完成される」のである。

